

令和8年度中原区市民提案型協働事業選定に係るプレゼンテーション 摘録

日時：令和8年5月19日(火)

13時10分～17時10分

場所：中原区役所5階501会議室

出席者：小倉委員、齋藤委員、国谷委員、石井委員、岩上委員

傍聴者数：2名

1 開会

事務局（企画課）

2 審査概要説明

事務局（企画課）

3 各団体による公開プレゼンテーション

（1）音とからだであそぶ！子ども音楽表現ワークショップ

一般社団法人子ども音楽表現協会からプレゼンテーション

（質疑応答）

齋藤委員：今回、園出張と親子向けとありますが、親子向けというのは、どのような場所で実施しようとされていますか。

団体：子育て支援施設で検討しています。

齋藤委員：園に行った際には、保育園のスタッフの方がいろいろと協力しながら行うと思いますが、親子向けの場合には、実際にワークショップを進行する方だけでなく、会場や子どものお世話などのその他のスタッフについて、外部の方の協力や、メンバーの中にそういった方がいらっしゃるのか、そのあたりはどのように想定されていますか。

団体：積算書でも親子向けと園向けで分けて記載していますが、親子向けの場合はスタッフの数を少し増やす予定です。保育士の資格を持つ知人がいるので、スタッフとして入っていただき、会場サポートなどをお願いできればと声をかけています。

石井委員：事前の質問でもいただっていますが、これまで中原区との関係性はあまりなかったとのことで、実際に実施する園や集客については、本事業が採用された場合、区からいろ

いろと教えてもらいながらこれから決めていく、というイメージでしょうか。ご自身でよく知っている園を開拓するというよりも、相談させてくださいというイメージということですか。

団体:以前、等々力にあるホールでコンサートを実施した際には、自分で足を運び、直接、保育園を回ってチラシを配布しましたが、今回は中原区との協働事業ということですので、ぜひ区と連携しながら進めていけると大変ありがたいと考えています。

国谷委員:私も同じことを伺いたいと思っていました。中原区に保育園を紹介してもらうイメージが強いのかなと感じました。もし協働事業でなかった場合は、ご自身で保育園を回られるのでしょうか。また、保育園に特化するよりも、こども文化センターなどでのワークショップの方がよいのではないかととも思いましたが、いかがでしょうか。

団体:園でのコンサートも親子向けのコンサートもどちらも実施できると、さまざまな家庭環境の子どもに届けることにつながると考えています。また、保護者の方にもこうした価値を広く知っていただけたらと思います、両方実施できればよいと考えています。

岩上委員:2点お伺いします。例えば、区内の保育園の皆さんにこういう事業があることをお知らせし、「うちで実施してください」と応募してもらう形にするのか、それとも皆様の方で効果が見込める園に対して働きかけるのか、その点はいかがでしょう。手上げ方式で募集するのか、それとも目的を持って、例えば市の直営園や小規模な園など、特定の対象を想定しているのかをお聞きしたいです。

団体:実現可能な形でご相談させていただければありがたいと考えています。

岩上委員:ありがとうございます。もう一点、親子ワークショップにも関連すると思いますが、中原区では音楽事業をいろいろ実施しており、その中で「中原区役所コンサート」も開催しています。そのうちの1回を今回、お子様や親子向けのコンサートにしたいと考えています。そのコンサートと本事業をジョイントしてワークショップを実施するのはいかがでしょうか。その場合、提案内容から若干の修正が必要かと思いますが、そういった対応は可能でしょうか。現在の提案にこだわらず、区の事業と連携して実施する意欲があるかもお聞きしたいです。

団体:素敵なお提案をありがとうございます。目的としては、中原区では子育て世帯が増えている中で、その方々の力になればと考えています。私は音楽と教育に関わることができまので、それを活かせればと思っています。今回は新規事業ですので、その目的が達成できるのであれば、さまざまな形で取り組んでいきたいと考えています。

小倉会長:岩上委員からのお話にもありましたが、仮に別々に実施する場合、1つ目の園への出張と親子向けの2つがありますが、後半のワークショップが分離された場合、より多くの子どもや親子に届けるために回数を増やすことは可能でしょうか。

団体:もちろん可能です。

齋藤委員:提案書の中に非常に重要なことが書かれていると思います。家庭の経済状況や保護者の意識によって、子どもの学ぶ機会が奪われないように、あるいは増やしていくという点です。それを実現するためには、親子向けの場合は、保護者が参加しようと思わなければ参加につながりませんし、園の場合は園のスタッフとの意識のすり合わせも必要です。さらに広げていくためには、児童相談所や音楽・教育分野以外の方々とも協働しながらリーチしていく必要があります。専門的な教育と音楽についてはプロフェッショナルでいらっしゃるので、将来的にはそういった点も検討していただけるとよいと思います。他分野のプロフェッショナルの方々と連携することで広がり生まれ、まさに協働事業の良い点ではないかと考えますが、いかがでしょうか。

団体:大変貴重なご意見をいただき、勉強になります。そのような方向で努力していきたいと考えています。

小倉会長:もう一点伺います。提案書には子育てサロンや子育て支援センターとありますが、こども文化センターにも子育てサロンがあります。そうした場所と連携すると、職員の方の協力も得られるため、より良いのではないかと思います。どのような形態があるかを事前に区と相談しながら選択していくのがよいのではないのでしょうか。現時点では大まかなイメージがあると思いますが、決定する前に選択肢を把握し、事前見学を行うことも重要です。運営者によって考え方も異なりますので、実施したい内容と受け入れ側の意向が必ずしも一致するとは限りません。初年度でもありますので、できるだけ相性の良い場所を見つけることが望ましいです。最初に区と相談し、見学を経て決定するのがよいと思います。

団体:ありがとうございます。

(2) プレキッズコーディネーショントレーニング事業

cocoli-hahali からプレゼンテーション

(質疑応答)

国谷委員:参加者同士の関係づくりが目標に入っていますが、中原区という枠組みだと広すぎないかと心配しています。1歳くらいの未就学児であれば、小学校区程度の地域の情報が知りたいのではないかと思います。その点はどのようにお考えでしょうか。

団体：普段、私も他の事業で中原区内のさまざまな地域から集まってくる子育てサロンを経験していますが、なるべく近い地域同士の方でグループになっていただき、話しやすい環境を作りたいと考えています。また、事前にアンケートを実施することで、気になることや悩み、疑問などを共有できれば、その点は補えるのではないかと考えています。

石井委員：時間について、単発でやや短い印象もあります。体力向上に向けたきっかけづくりや導入と捉えればよいのでしょうか。交流時間も 15 分から 20 分程度とのことですが、どこまでできるのか私には感覚が分からない部分があります。そのあたりについて、ご経験も踏まえていかがでしょうか。

団体：小さなお子様は集中力があまり長く続かないため、通常の水泳や体操教室のように 1 時間といった長時間の活動は継続が難しいと考えています。できれば、お父さんやお母さんと一緒に取り組む時間を 15 分から 20 分程度、集中して行えればよいと考えています。また、交流時間についても、必ずしもコミュニケーションが十分に取れる年齢のお子様ばかりではないため、長時間の会話は難しいと思われます。そのため、顔見知りになることや、他の保護者の方と話すきっかけを持つことを重視しており、深い関係づくりまではこの場で求めなくてもよいと考えています。全体として、1 時間程度が適切であると考えています。

石井委員：単発 1 回でも、ある程度の効果は得られるということでしょうか。

団体：特定の方法で必ずこうなるというものではありませんが、提案書にも記載したとおり、運動能力を高めていくことを目的としています。その方法をお父さんやお母さんにも理解していただき、ご家庭でも実践していただくためのきっかけづくりとして捉えていただければと思います。

石井委員：企画書には、すでに中原区でもさまざまな活動をされているとありましたので、よくご存じの方もいらっしゃるということですね。

齋藤委員：本日のプレゼンテーションやスライドは非常に的確でシンプルであり、私としては理解しやすいものでした。この場では適切な内容だと思いますが、一般の方やお子様、保護者の方に向けて説明する際には、より分かりやすく、楽しさや雰囲気が伝わる工夫が必要になると思います。コーディネーションとは何かという質問にも的確にお答えいただき、「見て・聞いて・考えて・体を動かす調整力」とのことでしたが、それだけでは具体的なイメージが浮かびにくい面もあります。どのような活動を行い、子どもたちにどの

ような影響があるのかといった点について、チラシや広報の際に工夫が必要ではないかと思いますが、その点はいかがでしょうか。

団体：実は、コーディネーショントレーニングに関わる仲間の間でも、その点は課題であると感じています。従来の水泳や体操教室は、技術や筋力を鍛えて一定の目標に到達することが目的ですが、本事業はあらゆる運動能力や適応力を高めていくものであり、コンセプトが伝わりにくい面があります。ただし、楽しみながら取り組む中で自然と身についていく点が特徴ですので、その魅力をどのように伝えていくかについて、現在も検討しているところです。ご指摘のとおりだと認識しています。

齋藤委員：例えば、本日のプレゼンテーションでも、子どもたちの活動中の写真や笑顔などがなく、すべて文章で説明されています。内容の関係性も単純な直線ではなく、重なりやプロセスがあると思いますので、その点を工夫することで、より多くの方に共感していただけるのではないのでしょうか。ただ、それをすべてご自身で行うのは大変だと思いますので、地域にはデザインが得意な方や子育て支援に関わる方もいらっしゃると思います。そうした方々と協働事業として連携し、区役所からの情報提供も得ながら進めることで、より広がりが出るのではないのでしょうか。

団体：ありがとうございます。

岩上委員：区役所としては、孤立の解消やつながりづくりをぜひ進めたいと考えています。しかし、現時点のご説明では、その効果が本事業から直接的に得られるのかがやや見えにくいと感じましたので、その点についてもう一度アピールをお願いしたいと思います。

団体：実際にこうした活動に興味を持たれる方は、比較的交流が得意で、積極的に参加される傾向があると感じています。一方で、自分だけでは解決できずに悩んでいる方も取り込んでいきたいと考えています。そのため、本事業を通じて運動能力の向上だけでなく、育児の悩みを共有できる場であることを発信していきたいと思っています。また、私はベビーマッサージの講師もしているため、その経験も活かしながら子育て支援について取り組んでいきたいと考えています。

小倉会長：取組が単発であっても、複数回参加したいという方が多くいらっしゃるのではないかと思います。チラシを7回分作成するとのことですが、例えば年間計画を提示するなど、2種類に分けることで参加しやすくなるのではないのでしょうか。毎回単発だと全体像が見えにくくなりますが、その点はどのようにお考えでしょうか。

団体：本来は年間計画を提示したいところですが、中原市民館の利用にあたり、3 か月前の抽選または空き状況による申込みとなるため、固定日程での開催が難しい状況です。本来であれば、第2 何曜日に定期開催する形で案内できると望ましいと考えています。

小倉会長：例えば、区役所の保健福祉センターなどの行政施設や、こども文化センターの午前中、社会福祉協議会の会議室などであれば、比較的予約が取りやすく、固定開催も可能です。今回、市民館にこだわる必要はないかと思いますので、まずはそうした場所の検討をされてはいかがでしょうか。単発での実施では事業の継続性が見えにくいいため、少なくとも前半・後半程度の見通しを立てて計画されることが望ましいと思います。また、有料で実施する点については、価値のある内容であることは理解できますが、協働事業である以上、多くの区民が利用できることも重要です。特に内容が分かりにくい場合、費用負担への理解を得にくい面もありますので、その点についてもご検討いただければと思います。現時点では変更の予定はないのでしょうか。

団体：会場としてこども文化センターなどを利用する場合、営利目的での使用ができないため、その場合には無料での実施も検討する必要があると考えています。現在の料金設定は中原市民館の利用を前提としているため、今後検討していきたいと思っています。

小倉会長：取組内容そのものに対する対価というよりも、会場費などの関係で有料設定をしているという理解でよろしいでしょうか。

団体：今回のご支援の範囲内であれば、無料で実施することに問題はありません。ただし、支援終了後に継続する場合、これまで無料で提供していたものが有料になると、その価値が無料であることが当然と認識されてしまうのではないかという懸念があります。本事業は一度きりで終わるものではなく、継続していく必要がありますので、その普及のきっかけとして今回の機会を活用したいと考えています。

小倉会長：ありがとうございました。

（3）おなやみ解決！キッズラボ・こども街かど相談会

一般社団法人こどもファミリーサポートネットワークからプレゼンテーション

（質疑応答）

齋藤委員：さまざまな社会的動向や統計のお話をご説明いただきましたが、内容についてはそのとおりだと思いますし、一般論でもあると感じました。ただ、このような取組は、地域に根差し、地域の事情を反映していく必要があるのではないかと思います。誰に相談したいかという点で考えると、地域のことをよく理解していたり、地域の実情に

詳しくあったり、困ったときに誰かにつないでくれるような方に相談したいと思うのではないのでしょうか。地域のことをよく知らない方には、なかなか相談しようとは思わないと思います。相談会を実施したり冊子を作成したりするまでのプロセスとして、そのための1年に使うという考え方もあるのではないかと私は思いました。前回は成果の点で少し難しさがありましたが、例えば区役所の関係部署にご自身でヒアリングを行い、地域の実情を反映させた小冊子を作成するなどの方法も考えられると思います。「法律が変わりました」という内容が書いてあるだけでは、手に取ってこの人に相談しようという気持ちにはなりにくいと思います。その地域に入り込み、人のつながりも含めて理解した上で、「よく知っているあの人なら相談したい」「あの人に相談したら次が開けそうだ」と思ってもらえるような1年にしてはどうかと思いました。いきなり成果として相談会を何回実施したとか、小冊子を作成したという形にするよりも、調査や研究という少し堅い言い方になりますが、そうした取組についてはお考えではないのでしょうか。

団体：先ほどお話しした小野山様が中原の子ども未来フェスタを運営されており、その中の活動に関するアンケートや調査研究に関わってほしいと言われているところです。これまでのアンケートで寄せられた子育ての悩みを、ある程度把握する準備を進めている点が一つあります。また、こども文化センターについても、現在、小杉こ文の館長とお話をしており、どのような子どもの悩みがあるのかについて、実際に子どもの声を聞いているのは私たちではなく、地域で子どもに関わっている方々ですので、そうした方々からのヒアリングも行いたいと考えています。どのような形や内容であれば読みやすく、悩みに寄り添えるものになるのかについても検討しています。子どもの悩み全体を把握するために、すぐに研究を立ち上げることは難しい状況ですが、現時点では、地域に根付いた活動をされている方々にヒアリングを行いながら一緒に活動し、その中で小冊子の内容を見直していくことを考えています。実際に関わった方々に分担して執筆をお願いする形を、現在は想定しています。

齋藤委員：それでは、これまでのお付き合いの中で、何か見えてきたものはありますか。中原区の特徴や課題などについてはいかがでしょうか。

団体：正直なところ、中原区全体の特徴については、まだはっきりとは見えていません。ただし、ここでは詳細はお話しできませんが、小杉こ文の館長とお話しする中で、中原区ではタワーマンションにお住まいの方が多く、保護者も子どもも忙しく、直接話す時間が取りにくいといった声はよく聞くと伺っています。それが中原区全体を反映しているかどうかは別として、そうした小さな声を積み上げて形にしていくことが、事業として重要だと考えています。

齋藤委員：そのようなネットワークをすでにお持ちとのことですので、それをしっかりと反映させていただき、仮に来年もこの場にいらっしゃることがあれば、「中原区はこういう地域で、私たちの見解としてはここが課題だと考えている」「区役所はこの点はできているが、この点はまだ十分ではないので、ぜひ取り組みたい」といった具体的な内容が示されると、より説得力があると思います。

団体：ありがとうございます。その点については、事業が採択された後になりますが、教育委員会の子ども会議のサポーターとして参加させていただく予定になっており、7月に見学に行く予定です。対象は川崎市全域になりますが、そうした場で子どもたちと直接関わり、アンケートを実施することも考えています。昨年度は「子どもの権利」をテーマにした会議だったと聞いており、そうしたメンバーがいることも伺っています。その中で、どのようにニーズを把握するか、場合によっては中原区在住・在学の方に絞ってニーズを把握するかを検討したいと考えています。また、これとは別枠になりますが、川崎市教育委員会にご協力いただき、学校で直接アンケートを実施することも事業として検討していきたいと考えています。

齋藤委員：そのような蓄積も、ぜひ活動の柱として取り入れていただければと思います。

団体：貴重なご意見をありがとうございます。

国谷委員：本日の最初の団体の方も話しされていましたが、家庭の経済状況や保護者の意識によって、子どもたちの体験が変わるという問題意識をお持ちで、非常に親和性が高いと感じました。その方は、より低年齢の子ども向けに音楽のワークショップを行っていらっしゃるのですが、方法は違っても同じ思いを持った方が中原区にもいらっしゃいますので、そうした方々をつなげていくことが大切だと思います。それは本来、区役所の役割かもしれませんが、ぜひさまざまなところとつながりながら進めていってほしいと思いました。

団体：現在は、土日などの空いた時間でしか十分につながれていない状況です。ただ、以前参加した中原区の集まりは非常に有意義であり、小野山様ともそこでつながることができましたので、今後も引き続きお願いできればと思っています。

国谷委員：西先生のところには行かれたか。

団体：はい、伺わせていただきました。アドバイスをいただき、早速連絡して訪問しましたが、拠点となる「箱」があることの重要性を感じ、大変参考になりました。

国谷委員：西先生は10年以上にわたって活動を粘り強く続けていらっしゃいます。今年

だけで終わるのではなく、挫折せずに、長く長く頑張っしてほしいと思います。

団体：実は、小冊子の大人向けの内容についても、執筆の打診をさせていただいています。できるだけ知り合った方々と一緒に進めていきたいと考えています。

石井委員：特にまちかど相談会についてですが、困りごとや悩みごと、例えばいじめの経過や背景などは、発達段階によっても異なり、非常に幅広く奥深い内容になります。解決までに1年、2年といった長い時間を要する重大なケースもあります。そのような中で、入口として気軽に相談できる点は良いと思いますが、内容によっては短時間の相談でどこまで対応できるのかが、なかなかイメージしにくいと感じます。事業内容には、専門機関や行政機関の紹介、情報提供、専門機関との連携などが記載されていますが、より相談者に寄り添い、継続的な支援につながるものになるのかどうか、事業の構造的に難しいのではないかと感じます。その点について、アドバイスの対応にとどまるのか、イメージが湧きにくいと感じました。

団体：この点については、二段構えで考えています。まず、今お話しいただいたようなケースについては、助言や情報提供が主な業務になります。もう一点として、ご指摘のあったいじめなどの深刻なケースについては、実際に1件対応しており、昨年の子どもの相談会をきっかけに、メールでのやり取りを継続し、状況の報告を受けたり、関連する情報をお伝えしたりしています。すべてのケースに伴走型で対応することは難しいですが、対応すべきケースについては取り組んでいきたいと考えています。内容の深刻度に応じて対応できる範囲にはなりますが、事業外、いわばボランティアとして、お子さんや保護者の問題が一定程度解決するまで支援したいと個人的には考えています。ただし、大枠としては、情報提供と助言にとどまる形になると考えています。

岩上委員：「中キラ」と相談会の関係についてですが、「中キラ」を実施することで子どもからの相談が多く集まる仕組みが、少し分かりにくいので、ご説明いただけるとありがたいです。

団体：基本的には、ポスターの約7割を楽しいイベントの内容で構成し、その中に相談ができることや、医師や弁護士が来ることなどを盛り込む形を想定しています。どちらがメインかと言えば楽しいイベントですが、その活動を通じて、自分の意見を言ったり、悩みを話してみたりできるような仕掛けを考えています。まだ試行錯誤の段階ですが、こども文化センターでもさまざまな取組を試しており、スタンプラリー形式がよいのか、他の方の得意分野と組み合わせるのかなど、工夫を重ねながら、柔軟に変化・進化させていきたいと考えています。

(4) 都市型空き地活用・レイズドベッド農園と生ごみ循環による地域コミュニティ創出事業
特定非営利活動法人あかねからプレゼンテーション

(質疑応答)

国谷委員：これから中原区側の南武線が高架化されたり、用地買収後から工事着工までの間に遊休地のような場所が生まれるのではないかと考えており、その点で本提案は夢があるなと思いながら拝見しました。ただ、実際にコンポストや生ごみリサイクルとなると、虫や臭いの問題が出てくると思います。このあたりにお住まいの方にとって、虫は特に抵抗感が強いのではないかと思います。その点についてはどのようにお考えでしょうか。

団体：どうしても臭いが発生したり、問題になるような場合には、その部分については実施しないという選択肢も考えています。その場合、生ごみリサイクルリーダーとして活動する中で、家庭でできた堆肥を集める場所を減量推進課が進めており、その回収先として登録することも可能です。NPO 法人あかね自体はすでに登録されていますので、生ごみそのものを持ってきていただくのではなく、ダンボールコンポストなどでご自宅で堆肥化されたものを回収し、それをレイズドベッドで使用するという方法も可能だと考えています。

国谷委員：現時点で、具体的に「ここならできそうだ」という場所がありますか。

団体：生産緑地であれば候補はありますが、具体的にここだという場所はまだ決まっていません。

石井委員：私も、遊休地でどのように実現するのかについて、具体的なイメージを持つことができませんでした。もう少し具体的なイメージを教えてくださいませんか。

団体：川崎市の資産運用課の方が、NPO 法人あかねが運営していた福祉交流農園を見学されたことがあり、その際に、市の所有地をどのように活用できるかという提案をさせていただきました。その流れで、資産運用課の方に一度プレゼンテーションを行っています。その場で保育園跡地なども紹介いただきましたが、すでに売却手続きが進んでおり、「そこが良い」という話にはなったものの、特段の問題がなければ使用できないという状況でした。また、活用してほしい土地のリストを提示していただいている部分もありますので、中原区以外であれば可能性がある場所もありますが、今回は中原区での取組を前提としています。ご指摘のとおり、アスファルト舗装されていない場所であれば実施は可能です。現在、「コミュニティファーム vovo」として、今年で3年目になりますが、生産緑地で会員制の取組を行っている場所がありますので、同様の取組も可能だと考えていま

す。ただ、本来は使われていない場所を緑のある空間や交流の場にすることで、防犯対策にもつながるのではないかと考え、今回提案させていただきました。

齋藤委員：私は非常に興味深く拝見しましたし、練馬区などでも同様に都市農業や生産緑地に関する取組が行われていますが、議論としては生産緑地をいかに残すかが中心になっている印象があります。その中で、どのように農地を増やしていくかという視点で取り組まれている点に、先見性があると感じました。例えばタイでは、実際に舗装された場所や活用が難しい場所にレイズドベッドを設置し、一定の収穫を上げている事例もあります。ぜひ実現していただきたいですし、いろいろと教えていただきたいと思いました。その上で、公共用地で実施する場合には課題も多いと思いますが、民有地での可能性はないのでしょうか。空き地や空き家、高架下の用地なども考えられると思います。中原区に限定すると難しい面もあると思いますので、例えば、コンポストの堆肥は中原区民の方が持ち込み、中原区の取組として位置付けつつ、ある程度の広さが必要な場所については区外で実施するなど、柔軟なストーリーも考えられるのではないのでしょうか。この動きは止めない方が良いと思いますし、すでにいろいろと工夫を考えていらっしゃるようにも感じますが、もし差し支えなければ、どのような可能性を考えていらっしゃるのか教えてください。

団体：今回はそのような前提で事業設計をしています。現在関わっている方々や団体とともに、空き家や空き地についてアンテナを張っており、遊休地に限らず、そうした話があれば前向きに取り組ませていただくというスタンスです。

齋藤委員：ぜひ中原区がモデルケースになると、今回の提案事業としての意義もさらに高まると思います。

団体：実際には、空き家活用の取組として、法政大学の方々と一緒に、空き家をどのように使うかという提案も行っており、資産運用課の方には大学生を連れてプレゼンテーションをさせていただいています。今回は私自身が農業に関心を持っているため、空き地に関する提案をしています。法人としては空き地・空き家の両方を視野に入れて活動しています。

齋藤委員：高架下の可能性はありませんか。

団体：可能性はあると考えていますが、現時点では東急などへの具体的な働きかけは行っていないです。今回、有益な情報をいただきましたので、知り合いの中でそのようなコネクションがないか調べてみたいと思います。

岩上委員：ありがとうございます。非常に魅力的なご提案だと思います。ただ、お話を伺えば伺うほど、中原区役所との協働事業であるべきかどうかについて、少し疑問も感じました。ご自身のお考えとしては、区役所との協働よりも、農業への思いの方が強いのでしょうか。

団体：中原区 SDC とは昨年頃から関わり始めており、また、当法人のもう一つの事業として地域活動支援センターを運営していますが、以前は高津区にあり、前回中原区に移転しました。中原区に畑もあり、地域の中で完結した関係性に取り組みたいという思いがあります。そのため、前職から転職し、自転車で通える範囲で生活するという生活スタイルに変え、現在は中原区で生活しています。そうした背景から、中原区を主体にした取組を行いたいと考えています。

岩上委員：ありがとうございます。

（５） 井田長瀬緑地忍者村プロジェクト

みんなで中原をもっとよくする会からプレゼンテーション

（質疑応答）

齋藤委員：ありがとうございました。市の公園で、十分に活用されていないものを皆さんの力で活用していこうという取組であり、内容自体はもちろん良いと思います。ただ、一番大事だと感じているのは、区や市との関係性です。実行委員会という形ではなくても、定期的に協議の場を設けていくことが重要だと思います。単に相談に行って答えをもらう関係ではなく、「こういうことをやりたいが、ここは区では難しい」「逆に区としてはこういう課題がある」といったことをお互いに共有していく時間や場が必要だと思います。そうした基礎を１年目にしっかり固めておくことは、とても重要だと思います。今回の事業に参画する中で、金銭的支援や広報支援ももちろんありがたいものですが、それ以上に、この場で関係性を構築し、それを深めていくためのエネルギーや時間をどう使うか、区にどう働きかけるか、ご自身でどのような準備をするかといった点が重要だと感じました。そのあたりについてのお考えや、区役所にお願いしたいこと、しっかり議論していきたいことがあれば、ぜひ教えてください。

団体：市民と行政との協働事業という位置づけですので、最初に協定を結ぶことにはなりますが、その後は年に３～４回程度、関係者や地域の方々を交えた定期的な連絡会、あるいは協議会のような場を設けて、情報共有を行っていくことを考えています。

齋藤委員：それは、スケジュールや行動計画の中に盛り込まれているということでしょう。

うか。

団体：現時点では明確に盛り込めてはいませんが、今後そのような形で考えていきたいと思っています。

齋藤委員：ぜひそれを明確に位置づけて、1つの柱にすべきだと思います。最初から協定ありきではなく、どのような協定を結ぶのかを一緒に考えていくことも大切です。区役所が抱えている課題や困りごとと、皆さんがやりたいことや困っていることを、どう共有するかという時間が非常に重要だと感じました。

団体：私どもだけの考えではなく、行政や関係部署のご意見を伺いながら、そのような仕組みを一緒に作り上げていきたいと考えています。

齋藤委員：はい、分かりました。

石井委員：ありがとうございます。提案書にも記載がありますが、公園管理運営協議会の申請については、地元町会の同意や参加も得られており、問題なく進めていけるという理解でよろしいでしょうか。

団体：これからの取組になりますので、現時点ではそのような体制はまだ整っていません。まずはこちらで組織や体制を整えた上で、地域の町内会などの方々にもお話をし、ご理解をいただきながら、協議会を立ち上げていきたいと考えています。

石井委員：提案書には2027年2月と記載されていますが、その時期を目標に進めていくということでしょうか。隣の中原市民健康の森でも同様の取組を行っていると同っていますので、うまく連携しながら事業展開できると良いのではないかと思います。

団体：市民健康の森については、立ち上げ当初から関わっています。ただ、関係者の中にはあまりオープンではない方もいらっしゃいますので、そこは焦らず、時間をかけて進めていきたいと考えています。

国谷委員：とても楽しそうなイメージを持ちましたが、これから多くのことを決めていくという点で、今年度中にゴールまで到達できるのか少し心配に感じました。質問ですが、「わんぱくの森活動」とは、どのような関係があったのでしょうか。

団体：私どもが井田長瀬緑地で活動していきたいという情報発信を行っていたところ、

その内容が建設緑政局に伝わり、一緒に現地を見に行ったり、イベントがあれば一緒に実施しようといった関係が生まれました。そのため、当初から建設緑政局としても、その場所で実施できる可能性を探っていたと、私どもは理解しています。

岩上委員：ありがとうございます。有志の方々だけでなく、町会・自治会といった地元の地縁団体の皆さんも巻き込んで、今後取り組んでいくというお考えでよろしいか、改めて確認させてください。

団体：はい。地縁の方々はもちろんですが、区内にはマンションにお住まいの方など、緑の活動に関心を持っている方も多いと思います。そうした方々にも参加していただきたいと考えています。井田山まではバスで 15 分程度で行けますし、実際に参加されている方もいらっしゃると思いますので、SNS などを通じて広く参加を募っていききたいと考えています。

小倉会長：今回の取組は、今後継続していくための基礎づくりに関わる部分だと思います。大人の視点で「こういうものがあつたらいい」という考えはありますが、地域の子どもたちや近隣の学校の子どもたちの意見を、今後どのように取り入れていくのが重要だと思います。子どもたちが「こういうものがあつたら楽しい」と思うことについて、アンケートを取るなどの取組は、これまで行われてきたのでしょうか。

団体：昨年 12 月に実施された井田長瀬緑地での建設緑政局のイベントでは、四ツ田緑地の運営者が近隣の小学校にチラシを配布したと聞いています。運営側としては、想定以上に多くの参加があつたという印象でした。イベント終了後には、行政の方がその場で子どもたちにアンケートを実施していましたので、その内容も参考にしています。今後は、イベントの実施とあわせて参加者へのアンケートを行ったり、学校を通じてチラシを配布し参加を募ったりするなど、さまざまな声を聞ける場を作っていきたいと考えています。

小倉会長：「子どもを主体に」という言葉はよく使われますし、国の「こどもまんなか」という考え方もありますが、大人の考えと子どもの考えが必ずしも一致するわけではないという点を意識していただきたいと思います。その点に配慮しながら、常にフィードバックを得て事業を進めていくことが大切だと思います。また、今後協議会を設立することを検討されているとのことですが、その際には、実績をどのように地域にアピールしていくかも重要です。成果が見える形にして、普段あまり関心のない方々にも声をかけ、町会の方々などにも見に来ていただいたり、参加してもらったりすることが大切です。自分たちだけで完結して楽しむのではなく、次の展開を見据えて、周囲をどれ

だけ巻き込めるかが重要だと思いますので、その点についてもぜひご配慮いただければと思います。

団体：その点については、私は現在 PTA 会長を務めており、今回の採択に関わらず、「山でみんなでやりたいことがあれば一緒にやっ払いこう」という呼びかけを、区内の学校などを通じて広く行っていききたいと考えています。すでに、地元ではない高校生の方から、植生図鑑を作りたいという声もいただいています。大人の都合で進めるのではなく、子どもたちが「この山でこれをやりたい」と思える形にしていきたいと考えています。私は田舎出身で、これまであまり意識していませんでしたが、山や自然の魅力は、都会育ちの子どもたちにとって非常に新鮮で、強く心に残るものだと感じています。その魅力をしっかり活かしていきたいと思いますし、大人の方々にも活用していただけたらと思っています。

小倉会長：ありがとうございました。

(6) おりがみへびをみんなでつくろう！つなげよう！

web circle からプレゼンテーション

(質疑応答)

齋藤委員：ありがとうございます。とても面白い取組だと思いました。今回は、子どもに対する直接支援ではなく、子どもに対する中間支援であると理解していますが、大人があまり手を出し過ぎない方がよいのではないかと思います。子ども主体の活動とし、子どもでは対応が難しい部分を大人が手伝う、という形が望ましいのではないのでしょうか。ワークショップの仕組みや、準備段階における子どもと親との役割分担などについては、多少工夫が必要だと感じます。地域に広げていく際には、子ども同士の関係で自然に広がる部分もありますが、相手の子どもの保護者の意向も関係してきます。その点については、皆さんが中間的な立場となって、保護者の方々と丁寧に関係づくりを行い、理解を得ながら進めていただきたいと思います。実際には、子ども同士で会社を作るという構想とのことですので、どのように子どもを中心に据え、自分たちのやりたいことを主体的に実現できるかが重要だと思います。保護者の方は、どうしても手を出し過ぎてしまいがちだと思います。先ほどのチラシのお話も、大人目線ではとても良いアイデアだと思いました。子どもがそれをどのように理解し、どのように感じるのかという視点も大切だと感じました。外から見てみると、うまくいかなかったり、予定どおり進まなかったりすることもあると思いますが、そうした過程も含めて、会社を作った子どもたちがどのように育ち、自立していくのかを意識したプログラムになると、非常に面白い取組になるのではないかと感じました。大人が関わり過ぎると、子どもたちは飽きやすく、「やらされている」という感覚が生まれてしまい、かえってもったいない結果になることもあります。あくまで

私の感想ですが、その点についてご意見があればお聞かせください。

団体：ご指摘いただいた点については、私たちも強く感じている部分があります。もともと学童保育から生まれた「ヘビ会社」ですが、地域に広げていくにあたり、学童で運営していた子どもたちがそのまま地域で会社を立ち上げるまで、現時点では想定していません。まだ「ヘビ会社」の人数も少なく、まずは広げていく段階だと考えています。そのため、初期段階ではどうしても大人が入らざるを得ない部分もあると考えています。「ヘビ会社」を開催できる場所を設定し、そこで社員を集めないと活動自体が成り立たないという課題もあります。まずは、さまざまな場所を確保し、「こんな取組がある」「こんなことができる」と発信しながら、興味のある子どもたちに参加してもらい、社員を増やしていく必要があります。人数が集まってくれば、「次はここでやろう」「あそこでもやってみよう」と、子どもたち主体で自然に広がっていくのではないかと考えています。今回ご提案させていただいた内容は、まず「ヘビ会社」を面白いと感じ、参加する子どもたちを増やすことを目的としています。その先の展開についても、もちろん視野には入れています。

団体：私からも補足させてください。ご指摘には大いに賛成ですし、私自身も子ども主体で広げていきたいと考えています。一方で、運営とは別の観点として、子どもたちが自然と集まっている場所、例えば田んぼであったり、「ミニカワサキ」のような既存の場など、可能性はいくらでもあると感じています。新たに場を作ること自体を難しいとは考えておらず、すでに地域で頑張っている子どもたちの存在も見えていますので、そうした取組とも連携していけたらと考えています。

齋藤委員：板橋区で、子どもたちの遊び場がなくなった際に、子どもたち自身が大人に相談してきた事例があります。ボランティアセンターでの出来事でした。そのとき私たちは、「陳情」という手段があることや、「議員に話してみたらどうか」といったことまでは伝えましたが、それ以上は踏み込みませんでした。話し合いを行うための議事次第があることを伝え、「自分たちで作ってみたらどうか」と促し、議事の進行や決定の仕方もすべて子どもたちに任せました。その結果、手書きで、非常に拙い陳情書のようなものが出来上がりました。そのときに私たちが特に気をつけたのは、大人が手を出し過ぎないことでした。会社というコンセプト自体はとても面白いと思いますので、大人が関わり過ぎて大人のものにしてしまわないようにしていただきたいと思います。

小倉会長：提案書を見ると、参加者の年齢が幼稚園児から高齢者までとあり、全世代を対象にしているようですね。

国谷委員：とても素晴らしい発想だと思いますが、人を集めることは非常に大変だと思います。区内では「なかはらっば祭り」や「子ども未来フェスタ」、「ごえん楽市」など、さまざまなイベントが開催されていますので、そうした場への出店から始めるのも一つの方法ではないかと思いました。そうしたイベントであれば、人も集まります。以前、「かわさき色輪っかつなぎ」という取組がありましたが、それを思い出しました。折り紙を使い、色にこだわった作品を作る活動でしたが、アート系の方々が運営していたため、完成した作品の見せ方や並べ方にも強いこだわりがありました。子どもたちに「見せ方も大切だ」ということを伝える良い機会にもなっていたと思いますので、その点も参考になるのではないのでしょうか。

団体：目標としては、さまざまな方が集まって作ったへびを、最終的にどうするのかというところまで考えています。完成したへびをみんなで並べて飾る、どれくらい長くつながったのかを床などに広げて可視化する、といったことができれば良いと考えています。最後にみんなで並べる作業を行うことで、「みんな凝った作品を作ったね」といった会話も生まれると思いますし、自分が作ったパーツがどこかに必ず含まれていることで、最後の飾り付けまで参加できたという実感を持ってもらえると思います。その実施場所については検討中で、市民館の抽選が難しく、提案書では宮内公民館と記載していますが、公民館だと地域が限定されてしまうため、もう少し多くの方が集まりやすい場所に変更したいという思いもあります。場所の確保が難しかったため、詳細を書けていない部分もありますが、最終的には、各地で活動した「へび会社」のメンバーが集まり、みんなで作ったへびで空間を埋め尽くすような形にできたらと考えています。寝転がったりしながら、自由に楽しんでもらえる場になればと思います。

小倉会長：かわさき市民活動センター主催の「ごえん楽市」に応募して参加してもらえば、和室など寝転がれる部屋を確保できる可能性があります。来場者はおおよそ 2,000 人程度と聞いていますので、多くの方に見てもらえる良い機会になると思います。そのようなイベントも選択肢の一つとして考えておくの良いのではないのでしょうか。また、生涯学習財団主催のイベントや、国際交流センターなど、さまざまなイベントがありますので、発表やアピールの場については心配しなくてもよいと思います。それよりも、制作のプロセスをどう広げるかが重要だと思います。現時点では宮内周辺での実施が多いように見受けられますが、こども文化センターやいこいの家などと連携し、人が集まっている場所に向いて制作してもらうことも有効だと思います。新聞紙などのリサイクル素材を使えば、さまざまなアイデアも出てくるでしょうし、作品の色合いも変わって面白くなると思います。そのように人の集まる場所に向いて実施することで、中原区内のさまざまな場所とつながることができ、最終的にイベント時に再会する、という仕組みも考えられるのではないのでしょうか。

(7) いつの間にか防災 講座

はちどりキッチンからプレゼンテーション

(質疑応答)

石井委員：内容についてですが、事前質問でもお聞きしましたとおり、対象者が未就学児・小学生世帯ということで、防災意識の醸成という点でどのように考えているのか、また、連続講座であることから参加のハードルが高くないかという点を懸念しています。そのため、曜日や時間帯についてどのような想定をされているのかをお聞きしましたが、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

団体：会場については、私の方で確保できない可能性もありますし、こうした内容で実施したいという意向をお伝えしても、先方の趣旨と一致しなければ開催に至らないと考えています。そのため、まずはご相談をさせていただいた上で、回数や曜日、時間帯については、これから決めていきたいと考えています。

齋藤委員：いろいろな講座を実施した結果、防災意識が高まり、家庭に持ち帰ってからも役立つ、そういったことを目標としているという理解でよろしいでしょうか。

団体：区役所で実施されたアンケートの中で、講座やセミナーのように一方的に話を聞く形式はもう十分だという意見があったと伺っています。そのため、実際に体験したり、自分で作ったりするなど、体験を交えた講座形式を提案しています。

齋藤委員：少し言葉が堅いですが、いわゆる効果測定のようなものとして、講座を受けて意識がどのように変わったのか、あるいは受講後に何か持ち帰るものがあって、それが講座の体験を思い出すきっかけになる、といった工夫については何かお考えでしょうか。

団体：3回目の講座で、保存食を作る・活用するという内容を予定しており、その中で小さなお味噌を作って持ち帰っていただく予定です。味噌はすぐに完成するものではありませんので、定期的に様子を見ることで、防災のことを思い出す一つのきっかけになるのではないかと考えています。また、私の方から「あのお味噌はどうなりましたか」といった形で受講者の方にお聞きすることで、受講後の変化なども確認できるのではないかと考えています。

齋藤委員：とても良いと思います。効果測定として、「講座を受けてこんなふうに変化した」「日々の生活がこうなった」といった点を、「お味噌はどうなりましたか」と聞くのとあわせて受講者にお聞きすると、来年度の事業実施報告の際に、この活動によってどのよ

うな効果があったのか、あるいはどの部分がうまくいかなかったのかを振り返ることができると思います。少し手間はかかるかもしれませんが、難しいことではないと思いますので、ぜひ検討してみてはいかがでしょうか。

岩上委員：子育て世代の防災意識向上は、現在、区役所としても非常に重要なテーマとなっており、その点を踏まえた事業ということで、大変関心を持ってお話を伺いました。一方で、事業内容については、現時点ではやや柔らかい印象も受けました。仮に採択された場合には、区役所とよく内容を詰めながら、提案内容をベースに事業を練り上げていくというイメージなのか、それとも別のお考えがあるのか、その点をお聞かせください。

団体：ありがとうございます。ご指摘のとおり、前者のイメージで考えています。私自身がやりたいと考えていることと、区の方方向性が一致していなければ、事業としてうまく進まないと思っています。今回が初めての提案で、分からないことも多いため、ぜひご相談をさせていただきながら進めていきたいと考えています。

小倉会長：質問ですが、この講座について、中原市民館の市民自主企画事業に応募するという発想はなかったのでしょうか。会場が確保でき、日程も確定し、広報もすべて行ってもらえるため、非常に効果的だと思います。あえて市民提案型協働事業に応募された理由をお聞かせください。

団体：正直なところ、市民自主企画事業の存在を知りませんでした。

小倉会長：そちらでも、補助金は出ます。

団体：特に深い理由があったわけではなく、中原区から「こういう事業がありますがどうでしょうか」とご案内をいただき、ありがたいと思い応募したという経緯です。

国谷委員：防災意識の低い方々にどうアピールするかは、とても重要な点だと思います。私自身の経験ですが、グループでトイレの専門家を招き、簡易トイレを備蓄しないと大変なことになるという話をしてもらったにもかかわらず、後から聞くと、男性メンバー4人のうち誰一人として備蓄トイレを購入していませんでした。そのとき、なかなか人の意識には響かないものだ、ととても悔しく感じました。その場では良い話を聞いたと思っても、実際の行動につなげるのは本当に難しいと感じています。そうした経験からも、先ほどお話のあった、味噌を持ち帰ってもらい、後日どうだったかを聞くという取組は、とても良い工夫だと思いました。私の失敗談で恐縮ですが。

齋藤委員：未就学児世代に焦点を当てることで、一般的な防災意識や防災準備と比べて、最も大きく異なる点は何だとお考えでしょうか。

団体：今後の展開として防災サポーターについても触れましたが、未就学児世代は「広がりのある世代」だと考えています。子どもが小さい時期は、いわゆるママ友同士のつながりが強くありますが、小学校、中学校と進むにつれて、そのつながりは徐々に少なくなっていくと思います。未就学児世代は、最もコミュニティの厚みがある時期だと感じています。その中で、小さな防災グループがいくつも生まれることで、例えば「みんなでコストコに備蓄品を買いに行こう」といった具体的な行動につながると考えています。私自身も子どもが小さかった頃にそのような経験があり、一緒に買い物に行く中で、「多めに買っておいの方がいいよね」といった会話が自然に生まれていました。そうした具体的なイメージができることから、未就学児世代を対象にするのが最も効果的ではないかと考えています。

(8) 防災レストランへようこそ！～ゆるっと地域づきあいのすゝめ～

ごみるんるんからプレゼンテーション

(質疑応答)

国谷委員：ありがとうございました。こちらは単発の1回で完結する講座という理解でよろしいでしょうか。今年度の中原区の総合防災訓練は、いつ頃実施される予定でしょうか。

岩上委員：10月を予定しています。

国谷委員：そのあたりのお話は、まだ聞かれていないということでしょうか。

団体：ホームページを確認しましたが、まだ掲載されていなかったため、現時点では未決定なのだと理解しています。

国谷委員：開催場所についても、まだ公表できないという状況でしょうか。昨年度はたまたまコアパークと小杉小学校で実施されており、その前の年は玉川地区の中丸子公園でした。今年は小杉地区ではない可能性もあるのではないかと考えていますが、開催場所は毎年変わっていくようなイメージでしょうか。

団体：小杉三丁目町内会が解散したこともあり、防災をどうしていくかを考えている住民の方も、この地域には多いと感じています。そのため、できればこの地域で実施するのが最適ではないかと考えています。

石井委員：防災というテーマについてですが、前半は段ボール家具を体験する内容で、後半は非常時や発災時、実際に火が使えない、ガスが止まっている状況を想定した料理ではなく、事前にストックしておいた食材を無駄にせず、おいしく食べるための料理教室という理解でよろしいでしょうか。その中で、参加者同士のコミュニケーションも図っていくということですか。

団体：実際に何かが起きた際の防災訓練については、私たちが実施しなくても、すでに多くの場で行われていると思います。私たちが目指しているのは、その前段階として、防災意識を楽しみながら高めることです。また、多世代の方々が一緒に集い、こうした活動を行うことで、緩やかな地域のつながりが生まれればよいと考えており、それが最終的な目標です。

岩上委員：ご説明ありがとうございます。今ちょうど映じていただいている講座概要を拝見すると、防災意識を持つきっかけになる点はよく理解できますが、そこから地域づくりやコミュニティづくりにつながるイメージが、私の中ではまだ結びついていません。特に、単発の講座で参加された方同士がどのようにつながっていくのか、その点についてどのようにお考えかをお聞かせください。

団体：私たちは昨年度は実施していませんが、これまで複数年にわたって中原区でイベントを実施してきました。その中で、参加された方々が楽しい体験を共有することで、自然とさまざまなコミュニティが生まれていく様子を実際に見てきました。新しい企画を立ち上げる方が出てきたこともあります。もしこれが難しい内容のセミナーであれば、その場限りで終わってしまうと思いますが、単発であっても、数時間楽しい時間を共有し、一緒に何かを作る、同じテーブルで料理をする、同じものを食べるといった体験を通じて、短時間でも十分なコミュニケーションが生まれるということを、これまでの経験から実感しています。その点を狙っています。

齋藤委員：ごみるんさんの「得意なこと」は、どのあたりに生かされているのでしょうか。

団体：私たちの得意な点は、「ごみるん」という名前にも表れているとおり、まず自分たちが楽しみながら、会場全体を楽しい雰囲気にするということです。ワークショップでもイベントでも、その姿勢を大切にしています。そうすることで、参加された方々も自然と楽しく、その時間を共有できる点が強みだと考えています。

齋藤委員：もう少し具体的にご説明いただけますか。

団体：例えば、料理と防災をテーマにする場合でも、まず私たち自身が基礎知識をしっかり学んだ上で取り組みます。その上で、参加者の方々の様子や特徴を早めにつかみ、「この方にはこうした関わり方をすると、より楽しく過ごしていただけるのではないか」と考えながら進めています。そのようなアンテナの高さは、私たちの強みだと感じています。

齋藤委員：そうした才能をお持ちだということですね。加えて、最近ではワークショップにおけるアイスブレイクの手法も多様化しており、同じような考え方でさまざまなチャレンジをされている方もいらっしゃると思います。そうした方々のアイデアや情報を具体的に取り入れながら、そのようなマインドを持って取り組まれると、さらに楽しい場になるのではないかと思います。そうした工夫を蓄積していくことで、どのようなテーマであっても「ごみるんさんの得意分野」となり、「次はこのテーマでやってみてほしい」と声がかかるようになり、結果としてコミュニティづくりにもつながっていくのではないのでしょうか。その意味でも、今回の取組は、そうした蓄積の機会として意識しながらワークショップを仕掛けていくとよいのではないかと感じました。

4 審査委員会委員の意見交換及び審査（非公開）

5 閉会

事務局（企画課）